青春を谷間に埋めて

無医村保健婦の記録　　岩間秋江

青春を谷間に埋めて

無医村保健婦の記録　岩間秋江

青春を谷間に埋めて

—無医村保健婦の記録—

昭和38年4月15日　第1刷発行

定価　280円

著者　岩間秋江
発行者　野間省一
印刷所　本文・慶昌堂印刷KK
表紙・千代田オフセット
製本所　有限会社　文信社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3-19
電話 東京(941)3111(大代表)
振替口座 東京3930

© 1963　検印廃止

序文

馬島　僩

山路を越えて、ようやくたどりついた稲子（いなこ）という寒村は、四方濃い緑に囲まれ、流れる水もきれいだ。しかし、村人の生活は、貧しい。

この村には医者がいなかった。往診料も払えない農家が多いし、すべりころびそうな坂道をよじのぼって、一軒から他の一軒へ行くのに三十分もかかるのでは、過重労働どころの話ではない。よほどの物好きでなくては、医業を営む気にはなれない。そうつくづく淋しく思いながら、「よく君が辛棒していてくれるねえ」と、岩間君に感謝するような、ひやかすような言葉をかけて、草むらを分けてわたしは歩いた。

こんな山の中で、女一人で衛生管理をするなんて、まるで不思議なことだ。岩間君は、「違法の治療行為をやるのは、気がひける」とたびたび、わたしに訴えてくるのだが、「人間の生命は、自分で守る権利がある。その手伝いをするのに、何の遠慮がいるもんか、まして往診料も貰わず、薬代も、いただけないのに医師法も糞もあるもんか、危険な処置さえしなければ、何をしたって、君の常識で結構だ」と激励するわたしは、もし自分自身が、この村の医者になれ、とでもいわれたら返事に窮するだろうと、岩間君のかげにかくれる気持になったものである。まるで前線の兵士にかくれて身の安全を期待する将校のように。

今度、この稲子の生活記録を本にするというので、それが、日本の山村（といっても東京からあま

り遠くない）の現実を描写している点、身にせまるものがあり、真実は、どんな想像よりも、人々の心の奥に迫るであろう、ととても喜んだものである。

その稲子に、ついに医者がはいった。それが岩間君よりもよい仕事ができるかどうかは、わからない。法的な資格があるとかないとかの問題よりも、愛情と努力とが続くか否か、ということの心配である。稲子には、岩間君が運び込んだ愛情が、今日でも松杉の梢の上を吹いているし、小川に流れつづいている。

丸木俊子

何年前だったでしょう。わたしはすっかりやせてしまって、熱が出て、咳が出て、とうとう肺結核になったと思い、空気のよい片瀬の山の中へ引越して行きました。

一つはそこにある馬島さんの診療所がたよりでした。

その診療所から、山を登って看護婦さんが注射にきてくださいました。いつも二、三人の看護婦さんがいて、かわるがわるお世話になりました。その中にあんまりおせじもいわないし、だが怒ったこともない、淡々として、いつも普通の顔をして、びっくりもしないし、あわてもしない人が一人いました。それが岩間秋江さんでした。

その頃から岩間さんより十も十五も年上のわたしが、あれやこれや体のことから、身のまわりのこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とからみんな相談するのがどうも不思議です。

やがて馬島さんの診療所がある事情で閉鎖すると、岩間さんはたった一人で、富士山ろくの稲子に行ったのです。そこは無医村でした。

毎年春にはわらびが稲子から東京のわたしの仕事場にとどきました。

『稲子の日記をつけておいてくださいね』

わたしは岩間さんにたびたびいいました。岩間さんがついに無医村に診療所を設立するだろうなどとは思いませんでした。ただ、一人の女が、黙々と働く、そのことが風のようにむなしく消えてしまわないように、と日記のことを願ったのです。

ついに、七年の歳月がながれ、岩間さんはずっしりと重いふろしき包みをもって東京にきました。このふろしき包みは七年間の日記でありました。

「蕗のとう」「仲秋明月」「死ぬ幸福」など、岩間さんの話は、ユーモアにみち、時に凄絶です。

「この日記をもとに一つずつの話にまとめましょう」とわたしがいうと、「とても書けない」と岩間さんはかぶりをふる。

「大丈夫よ」

「いいえ、だめ」

と押し問答のすえ、馬島さんから貴司山治さんにたのみ、その指導で、この原稿がまとまりました。

岩間さんは現在、伊豆南端の保健所で働きつづけていますが、日本人の生活を、日本人の命を、ともに生き、ともに泣き笑ってきている人はここにあったのです。

目次

序文……一
谷間の村……七
死ぬ幸福……一七
つり橋……二五
健ちゃん……三二
栄養講習会……四〇
秋祭り……四六
猪の置銃……五一
東京の友人……五八
蕗のとう……六六
結婚祝い……七二

受胎調節実地指導……八二
馬島先生……九一
子安講……一〇五
結核退治……一二二
むじな屋敷……一三〇
ランプ村……一三六
仲秋名月……一四二
牛と豚と人間と……一五三
無料診療……一六四
壇上に立つ……一七二
辺地の黒い土……一八二
診療所が建つまで……一九九
あとがき……二二一

装幀・カット　丸木俊子

谷間の村

一九五二年六月のある日。

わたしは東海道線富士駅から出る身延線にのって、静岡県の深い山中、稲子（いなこ）という小駅におりた。わずかな荷物を下げて、たった一人で……

プラットホームに立つと、すぐ前は、荒れすさんでひろびろとひらけた富士川で、何万、何十万という白い石ころが、川原をなして、折柄の梅雨季なので身延の方から流れ下る濁水が、川原の中央で、ごうごうたる音を立てている。

ちょうどここで、富士川がわたしの目の前にそそり立つ白鳥山のふもとにつきあたり、大きく屈折して流れているのであるが、わたしの立っているうしろはすぐ山で、そこに平地は一寸もなく、前はみんな富士川の川原だから、畑はどこにもみあたらない。

白鳥山に並ぶ丸い山があり、それが丸山という名だとはあとで知ったが、その山のすそだけが、文字どおり猫の額ほどの平地で、二十戸ぐらいの古い百姓家が密集している。

駅前、――といってもプラットホームをおりて線路をまたぐと、すぐそこにある文房具を売っている軒の低い小さな店に立ちより、そこのおばさんにきくと、このへんは下稲子部落で、わたしの赴任

する上稲子の農協は、ここから四キロ奥の山の中だという。

その方をみると、山また山が奥へ奥へと折り重なって空をかくしている息詰るような深い谷間なのだ。富士山の山麓にあるのに、山ひだの中に入ってしまっていて富士の姿は全く見えない。

わたしはフーとため息をついて、駅のある下稲子部落の土橋の上で、足がすくんでしまった。橋は二間ぐらいで、下を流れているのが稲子川らしく、それはわたしの今みた富士川にそそいでいる。地図でみると、稲子川というあるかないかハッキリわからないような川が、まがりくねって、富士川と対流しつつ、静岡県と山梨県の県境を遡り、富士山の西側にある白糸の滝の西方付近で消えているのだ。

その稲子川に沿うた深い細い谷間が、わたしの行く柚野村上稲子という部落なのである。川が細いのは谷間がせまいからで、そんなに発達していないこのような狭小な地形の谷間にも、何千年ものあいだ、人が住んで農業をいとなんでいる。これが人生かと思うと、わたしはふりすててきた過去の自分の人生から、やっとのがれて、恰好なかくれ場所をみつけたようにも思った。

それまでわたしは保健婦として、あるところに働いていた。そこは革新的な人々の営む診療所であった。わたしは自分でも小さな奉仕をそこの仕事にささげることで、生きていく喜びを味わったものだ。

ところが、そこに恐ろしい魔の淵があった。

わたしは良心をすてない限り、その人たちについて行けなくなった。わたしが悩むのをみて、秘密のろうえいを怖れたその人たちは、巧みにわたしの存在を消そうとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わたしは、おびえ、絶望し、正義も、革新も、生の希望も、一挙にうちくだかれて、自分の生命を投げ出した。それを救ってくださった二、三の先生たちにおしえられ、医者のいない村の、不幸な人々の友となって働くことで、第二の人生を見出そうと志した。

そうしたわたしの前半生は、今も秘密のままにしてある。わたしはそこを脱出して、この山奥の谷間の村へやってきたのだ。

わたしの手には小さなケースと、肩には保健婦の用いる道具一式を入れた黒皮のカバン、質素なツーピースの制服を着て運動靴をはいて歩く。

橋を渡ると、頭の上を今おりた鉄路の走るガードをくぐり、しだいに上りになる細い道を何度か曲ると、もう駅前の下稲子部落を出てしまい、右手は荒れて岩石ばかりの稲子川、左手はそそり立つみどりの山、そのあいだの二級国道——ここではそれがもっと細い山道となって、奥へ奥へと上って行っている。行けば行くほど深い谷間へはいって行く感じだ。

稲子川の向う側に小さな面積の田が段々と散在していて、家という家はみんな山の中腹のところどころに建っている。平地というものがみあたらない。全くの谷間！

うねった道を歩きつくすと、行手をふさいでいた山の尾根の向うに、また別の山が、その向うにも、まだ奥にも、だんだんうすく白くなって重なっているのがみえてくる。

いくら歩いても、人にはほとんど出あわない。無医村だというのもこれでは無理はない。人がいないのだ。医者の開業する余地はないと思う。あとでわかったのだが、稲子の谷間には二百六十戸に千五百人の人々が住んでいるのだが、平均反別二反以下。村中の完全農家は二戸だけで、全長八キロに及ぶ谷間の内、谷の入口に近い人々の多くは富士宮や吉原の工場の日やといに通い、地の利が悪くて出てこられない谷の奥の人々は、付近の山林にわけ入っての山林労働……みんな貧しい人々である。

柚野村の山林は千何百町歩とかあって、昔は村の共有分が多かったが、共同事業の養蚕に失敗して山林の三分の二を他地方の人の手にとられてしまい、それがこの谷間の村の貧困の大きな原因に今もなっている。

それでも先祖代々住みついたこの八キロの暗い谷間に、人々は黙々と生きつづけている。二反たらずの山田を耕作し、近くの都市に出て行って働き、深山の木を伐り、日かげの谷間をねぐらとする人々。

しかしそこには医者はいない。いては医者の方でくらしが立たないのである。村に病人が出ても、だれも診てくれる者はない。お産の時も、産婆はこない。赤ん坊がひきつけをおこしても、アレヨアレヨと親たちがそばで騒ぐだけ。重病人でどうしても病院へという時は、タンカにのせて、胸つき八

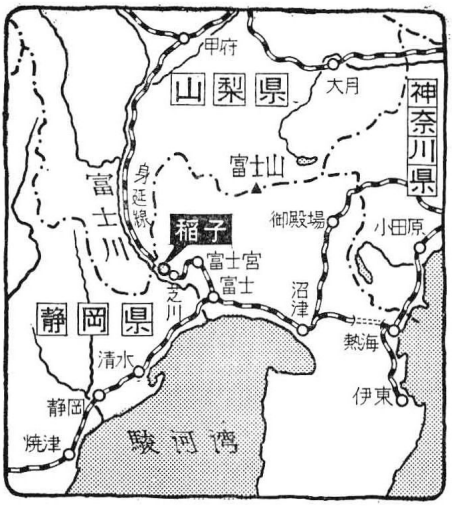
丁の峻嶮な桜峠（標高三六八M・急坂五〇度）をこえて下柚野に出、約八キロの山道、峡谷道を、富士宮まで運ばねば外に方法はない。病人が途中で死んでしまうことなども珍しくなかったという。

そういう山奥の谷間の村へ、わたしは行くのだ。

「後悔するわよ、きっと」

「三ヵ月つづいたら、うち、あんたの前で逆立ちしてみせたげるわ」

と別れの席で友達はいった。それは単なるからかいではない。そんな山奥へはいってしまっては技術がおくれ、昇進もないぞ、という切なる忠告なのだ。



わたしは十六の歳から十年努力して、看護婦免状の外に、助産婦免状もとり、あと何年か都市の近代的な保健所で腕をみがけば、昇給と賞与で貯金もでき、最新技術が身について、助産所でも保育園でもやれるし、家庭をもって幸福な生活が営める……それがわたしたち保健婦の共通の夢といってよかった。

わたしは、その幸福にそむいたのである。県の公務員に戻れる資格もすて、辺地部落の一農協の傭人として、これからわたしのもらう月給は六千円だ。

今までいた診療所では九千円もらっていた。それよ

り三千円少ない辺地の無医村へわざわざ飛びこんできたのである。
「あんた、失恋したの？」
とわたしの顔をのぞく友達もいた。これはあとになってもよくいわれた。わたしにはそれどころではない「秘密」があった。わたしなりに、わたしは悩んだ。浮いた心はどこにもない。
「すべてを忘れて、その稲子というところで働いてごらんなさい」
わたしを死から救ってくださった丸木俊子先生はわたしの背なかをなでるようにしてはげましてくれた。
「しかし、大へんな苦労だぞ、まあやってみろ」
と馬島先生はおっしゃった。両先生のこの二つの言葉が、わたしの背なかを前へ押したり、わたしの足を立ちすくませたりする。
行けば行くほど道の両側へ山が迫ってきて、行く手をみるとやはり山、この谷間は八キロ向うの天子ヵ獄で行き止りになっているのだ。
その手前の入山部落から東へ山を越えたら、白糸の滝に出られるという。つまり、ここは富士山の西側にあるかくれ里のような谷間なのだ。淋しい。ひしひしと淋しくなってくる。こんなはずではなかった。
立ち止ると、涙がにじみ出してきた。いつの間にか歯をくいしばっている。
柳橋、と、ようやく読み取れる朽ちた橋にきた。ここから農協の事務所まであと二キロだ。重い荷物を持っているわたしはしばらく休む。それからまた歩き出す。人っ子一人出会わない。

「酒」という看板の出た雑貨屋が一軒きりあった。店の中にいた人がわたしを見てだまって、おじぎした。わたしを何だと思っているのだろう？

中腹の段地に学校が見えてきた。木造の校舎が細長く建っている。右側が小学校、左側が中学校で中の校庭はせまい。

学校をすぎると、右手にまた橋が見える。

少し行くと人家が十五、六軒散在する程度の小盆地の部落へきた。小盆地は左手の白水山（八一一メートル）と右手の桜峠にとりかこまれた桶の底のような日蔭の村だ。白水山の裏は山梨県である。この小盆地の二級国道の左側に、杉皮屋根の建物があって、「稲子農業協同組合」という古びた看板がかかっている。わたしの足はとまった。ここがわたしの棲み家かと思うと知らずにため息が出る。その建物より一段高いところに農協の精米所があった。

わたしは目をつむって農協の埃によごれたガラス戸をあけた。すぐ板ばりの土間でちょび髭をはやした組合長と、女子職員四人が事務机に向っていた。醤油から日用品まで細々（こまごま）とした物をならべ、一メートル四方ほどのガラス戸棚に家庭薬から脱脂綿、ホータイまで陳列して売っている。

「ごめんください」

そのひと声で女子職員の八つの目がいっせいにわたしの方へむいた。

「保健婦の岩間です。今着きました」

というと、組合長が自分の机の前からとび立ってきて、

「よくきてくれたな、さあ上れや」

無医村の農協が、せめて保健婦でもといってわたしを雇ったのだ。わたしは組合長の前に腰をおろして型のとおり、

「どうぞよろしくおねがいします」と頭を下げた。

「事務室のつぎが集会所でな、あんたにはそこで寝てもらうことになっとる」

組合長はわたしをそこへ案内した。そこは二十畳じきの板の間だ。二人の女子職員がついてきて板の間のすみに布団を敷いてくれたので、疲れているわたしはすぐ横になった。水を打ったような静かな中に蛙の鳴き声がきこえる。

わたしはこの農協を足場に、あすから働かねばならない。とうとうきた。もう引き返せない。わたしはじっと目をとじた。部落の人々の生活は意外に貧しいようだ。その人々がわたしを待っているのだ。何から手をつけたらいいのか？　つかれてうつらうつらしてしまう。

「……三ヵ月つづいたら、あんたのまえでわたし、逆立ちしてみせてあげる、ハハハ」

「よせよせ岩間君、今に後悔して逃げて帰るだけだよ」

とおくでその声々がまだきこえている。わたしは農協事務所のうす汚い部屋の片隅で眠れないままに何回か寝返りをうった。いつのまにかわびしい夜となり、暗い裸電球が、わたしの人生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com